



マックス・ウェーバーの理論的变化に関する計量テキスト分析の試み : 『経済と社会』旧稿と改定稿の比較を事例として

橋本, 直人

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(2):91-107

(Issue Date)

2022-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81013205>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013205>



マックス・ウェーバーの理論的变化に関する計量テキスト分析の試み ——『経済と社会』旧稿と改定稿の比較を事例として

Metrical Analysis of Theoretical Change in “Wirtschaft und Gesellschaft” by Max Weber

橋本 直人*

Naoto HASHIMOTO*

要約：多くの学問分野にとって、学説史研究は分野の基礎をなす重要領域でありながら、しばしば検証可能性に欠け、複数の解釈が併存したままになりがちである。社会学の古典、マックス・ウェーバーに関する研究にもその傾向は否めない。そこで本研究は、マックス・ウェーバー研究を事例として、計量テキスト分析の導入を試みる。具体的には、草稿群から編集されたウェーバーの著作『経済と社会』について、「旧稿」と「改訂稿」との間に(1)基礎的諸概念の理論構成に、単なる用語法以上の差異があるか否かを計量的に解明し、(2)その差異の意味をウェーバーのテキストにさかのぼって解釈する。そのうえで(3)この差異がより具体的な社会的な内容（ここでは支配論）に及ぼす影響を計量的に分析し、その意味をテキスト解釈によって明らかにする。以上の分析を通じ本研究が明らかにしたのは、(1)「旧稿」と「改訂稿」の基礎概念には重要な差異が存在する、(2)その差異は「旧稿」での流動的な秩序観が「改訂稿」で放棄されたことを示唆する、(3)この差異が具体的には支配論における「服従」概念の規定にも影響している、という3点である。こうした結果を踏まえ、本研究は学説史研究にとって計量分析が有意義な相補的アプローチであることを主張するものである。

キーワード：テキストマイニング、Max Weber、『経済と社会』、ダブル・コンティンジェンシー、学説史研究

1. はじめに

どのような学問分野であれ、学説史研究はその学問分野の基礎をなす重要な領域とみなされてきた。だがその一方で、より経験的・実証的な研究が重視される傾向の中で、学説史研究の担い手が減少する傾向にあることも否定できない。そしてこうした傾向は、学説史研究が、総じて検証可能性の乏しい領域とみなされてきたことも一因となっているように思われる。

本稿が主題とする社会学史、特に社会学の古典とされるマックス・ウェーバー（1864~1920）に関する研究もまた例外ではない。ウェーバーの没後100年を超えた現時点まで、ウェーバーのテキストをめぐるさまざまな解釈が展開され、また解釈をめぐる論争が交わされてきたが、それらが何らかの形で「検証された」、あるいは「決着した」と言えるケースは極めて少ないと言わざるを得ない。

もちろん、決着のつかない論争が存在すること自体は、学問の発展における一段階としてあり得ることでもあろう。だが、条件次第では対立の膠着がある種の閉塞状況を生み出しかねないのも事実である。そしてその閉塞状況が、単に学説史研究の低迷にとどまらず、最終的には当該学問分野の理論的・思想的な基盤にさえ影響を及ぼすこともあり得るのではないか。

こうした状況認識から、本稿では、学説史研究における解釈仮説や論争を「検証」¹するための方法として、近年急速に進展している計量テキスト分析ないしテキストマイニングの手法の導入を試みたい。

この試みを通じ、学説史研究に新たなアプローチがあり得ることを提示し、学説史研究の活性化を図る一助となることが、本稿のささやかな目的である。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2021年10月7日 受付)
(2022年1月24日 受理)

本稿が対象とするマックス・ウェーバーについては、昨年7月に全集(Max-Weber-Gesamtausgabe、以下「MWG」と略)が完結した。だがその編集過程を通じて、ウェーバーの晩年の主著とされてきた『経済と社会』が、実際には統一的な単独の著作ではなく、むしろ複数の時期に執筆された「草稿群」を編集した著作であることが明らかになった。特にテンブルック[1977(1999)]や折原[1988]らの先駆的な研究、そして折原やシュルフターらを中心とした論争(たとえば[シュルフター／折原 2000])を通じて、(1) この「草稿群」が、大きく1910～14年ごろに書かれた古い草稿群(以下「旧稿」と、1919～20年ごろに書かれた新しい草稿群(以下「改訂稿」とに分かれること、(2) この「旧稿」については、『経済と社会』とは別に1913年に雑誌『ロゴス』に発表された論文『理解社会学のカテゴリー Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie』(以下、文中では『カテゴリー』と略記する)で提示された諸概念が主に用いられていること、(3) これに対して「改訂稿」には『経済と社会』の第1章と位置づけられてきた『社会学の基礎概念 Soziologische Grundbegriffe』(同じく『基礎概念』と略)の諸概念が用いられていること、などがわかっている。

だが、このことをどのように解釈すべきかをめぐっては、今なおさまざまな対立的解釈が提示されたままであり、しかもそれらについて判断する手掛かりさえ見いだしたいのが現状である。

たとえば、『カテゴリー』で詳細に論じられる「諒解 Einverständnis」という概念が『基礎概念』では放棄されていること、これに対応して『経済と社会』「旧稿」では「諒解」概念が用いられているのに対し、「改訂稿」では用いられていないこともわかっている。だが、そのことが何を意味するのかについては、解釈が対立したまま解決の糸口を見いだせていない。

具体的には、そもそも『カテゴリー』と『基礎概念』との関係を連続的と見るか大きな変更と見るのか(たとえばシュルフター[2009:120-3]は連続性を強調)、大きな変更だとしてもその変更の意味をどう理解するのか(諒解概念に関するヘルメス[2003]とリヒトブラウ[2000]の評価は対極的である)、さらにその変更が、『経済と社会』のより具体的な社会学的な内容にあたる経済社会学や支配論などにまで影響を及ぼしているのか、など対立点は多岐にわたる。

つまり、『カテゴリー』から『基礎概念』への変化が、単なる用語法の変更の問題なのか、それとも理論上での何かしら実質的な変更を意味するのか、理論的な変更だとすればその意味は何か、といった(理論

的にはもっとも重要な)点については、解明の手立てが見えないまま膠着していると言える。

こうした状況に対して、伝統的なテキストの意味解釈とは異なったアプローチによって一定の「検証」を試みることはできないだろうか。ウェーバー自身が述べるように、「意味上はどれほど明証的な解釈であっても、それだけで、またその明証という性質のゆえに、因果的にも妥当性のある解釈であると主張することはできない」[MWG I/23:156=1972:16-7]とするなら、対立的な諸解釈に関しても、その妥当性について何らかの「検証」が試みられてよいのではないか。

こうした観点から、本稿は『経済と社会』の解釈にテキストマイニングの導入を試みる。テキストをデータとして統計処理し、頻出語や共起関係²などのデータからテキストの性格を分析するテキストマイニングの手法は、以前から言語学・文学研究などの分野では広く用いられてきたが、近年、さまざまな分野で次第に取り入れられ始め、注目を集めつつある³。

もちろん、後述するようにこれらの手法そのものが万能というわけではないし、この手法によって上記のような解釈の対立状況を一刀両断に解決できるわけでもない。だが、これまでの意味解釈的アプローチと相補的なものとして——まさに「明証的な意味解釈」に対する「因果的な検証」の一つとして——試みる価値はあるだろう。

2. 分析の対象と方法

本報告で行なう分析の概要は以下のとおりである。

【分析対象】

本報告の分析対象は、

(1) 『経済と社会』改訂稿に属するものとして『社会学の基礎概念』[MWG I/23: 147-215]と、より具体的な内容を含むテキストの例として『支配の諸類型』から支配一般に関する概念論[MWG I/23: 449-455]および官僚制論[MWG I/23: 455-468]を用いる。

(2) これに対応する旧稿側のテキストとしては、『理解社会学のカテゴリー』[MWG I/12: 389-440]と、『支配の社会学』の支配概念論[MWG I/22-4: 126-149]および官僚制論[MWG I/22-4: 157-234]を用いる⁴。

ここで『支配の諸類型』および『支配の社会学』から、特に支配概念論と官僚制論を対象として選ぶのは、両者において論じられる対象の共通性が明らかであり、そのためにより基礎的な概念上の差異を取り出しやすいと判断されるためであ

る（詳しくは後述を参照）。

なお、テキストのデータとしては CD-ROM「Max Weber im Kontext」[Karsten-Worm 1999] を利用した。これは簡便かつ手入力によるミスの回避が期待できるとともに、この CD-ROM が『経済と社会』初版に依拠している⁵点でも好都合である。

【分析手法】

分析には樋口耕一氏の開発したフリーソフト「KH Coder」(ver. 3) を用いる⁶。KH Coder により、まずは上記 4 点のテキストから動詞・形容詞 (or 副詞)・名詞の頻出語を抽出し、リスト化する。その上で、sein 動詞や können、müssen (英語でいえば be 動詞や can、must といった助動詞) など検出不要な語を削除し⁷、変化形や派生語・合成語⁸などを必要な範囲で語群としてまとめる(「コーディング」と呼ばれる手順)。こうして得た語群に関して、各対応テキスト間での出現頻度や共起関係の比較を行なう。こうした比較を通じて、単に用語の比較ではなく、一定の意味を共有する語群がどのように用いられているか、ひいてはテキストの中でその語群が——つまりはその語群が指示する概念が——どのような位置を占めているかが明らかとなる。

【分析手順】

(1) まず、「旧稿」「改訂稿」のそれぞれについて基礎的な概念規定を与えていると考えられる『カテゴリー』と『基礎概念』について、頻出語を抽出して比較する。そのうえでコーディングを行なって主要な語群を取り出す。そしてこれらの語群間の共起関係を図示化したもの(共起ネットワーク図)を作成することで、各語群(およびそれが指示する諸概念)が両テキストにおいてどのように位置づけられているかを検討する。そしてそれをもとにテキストの内容にさかのぼり、概念の位置づけの差異が何を意味するかについて解釈を行なう。

(2) 基礎的な概念についての分析を踏まえ、より具体的な内容を扱っている『支配の諸類型』『支配の社会学』の、それぞれ支配概念論および官僚制論についても同様に分析を行ない、基礎的な概念規定の変化が、それぞれの具体的な理論内容にどのような影響を及ぼしているか、まずは計量的に比較する。そのうえで、計量的な差異が何を意味するかについて、再びウェーバーのテキストにさかのぼり、その差異についての解釈を行う。

以上の分析を通じて、(1)『カテゴリー』から『基礎概念』への変化が用語法レベルの変化なのか概念構成上の重要な変化なのか、(2)基礎的な概念レベルでの変化が(支配論という)より具体的なレベル

に影響を及ぼしているのか、(3) 及ぼしているとしたらどのような影響なのか、という 3 点について解明する。

3. 分析 (1) 『カテゴリー』と『基礎概念』の計量分析

まず、KH Coder によって『カテゴリー』と『基礎概念』から抽出された単語をそのまま頻度順に並べたリスト【図表 1】を確認しておこう(なお、紙幅の都合により、以下に言及する図表はすべて本稿末尾にまとめて掲載する)。

一見して明らかなように、「行為(する) handeln」「秩序 Ordnung」「意味 Sinn」など、両者に共通して頻出する語も多数見られる一方、『カテゴリー』でしか用いられていない「諒解 Einverständnis」はもちろん、「主観的 subjektiv」や「予想 Erwartung」など、『カテゴリー』での頻出語が『基礎概念』のリスト上位には見られず、代わりに「関係 Beziehung」などの語が頻出するようになっていることが確認できる⁹。

とはいえ、上記リストに戻って細かく見ると、たとえば『カテゴリー』ではリストの 49 位「妥当する gelten」とは別に、リスト 40 位に「妥当している geltend」(現在分詞)、48 位に「妥当 Geltung」(名詞形)が挙げられているなど、変化形・派生語が別々にカウントされていることが確認されよう。同様の現象は他の語についても生じている可能性がある。したがって、これらの変化形や派生語・合成語などを、一定の語群としてひとくくりにすると、単語レベルでの抽出とは異なった頻出の程度や共起関係が見出される可能性もあるだろう。

そこで、前節で述べたように、主要な頻出語を中心にコーディングを行ない¹⁰、関連する語を語群としてまとめたうえで分析してみよう。まず、コーディングによってまとめた各語群について、再び頻度順に並べたものが【図表 2】である。

この図表を【図表 1】と比べてみると、頻出語(群)のリストとして大きな変化は生じていないことが確認できる。このことに照らせば、コーディングの際に恣意性が持ち込まれて結果を大きく変更してしまったという可能性はおおむね否定されよう(以下、単語を指す際には〈 〉、語群を指す際には《 》でくくって示す)。

そこで、このコーディングに基づいて『カテゴリー』と『基礎概念』との共起ネットワーク図を作成したものが【図表 3】【同 4】である¹¹。

この二つの図を見比べると、『カテゴリー』と『基礎概念』の概念枠組の差異が直観的に見てとれるであろう。まず【図表 3】をみれば、『カテゴリー』においては、《行為 Handeln》の概念を中心として、

《主観（的）Subjekt(-iv)》・《予想 Erwartung》・《準拠 Orientierung》、および《客観（的）Objekt(-iv)》・《可能性 Chance》などの概念群が理論構成の中心を成していることが確認できる。

よく知られているように、『カテゴリー』の叙述は「行為者の主観的な意味」から出発し、その行為者が相互に他者の行為を予想し、この予想に準拠させて行為することによってさまざまな社会的現象が（客観的には「確率的」な現象として）生成される、という理論構成をとっている。このことを踏まえれば、【図表3】における各概念の位置づけはごく自然なものと言えよう。

だが、これと【図表4】を比べて見れば、『基礎概念』では《主観》の中心性が大きく低下し、《客観》《予想》といった語群が主要な共起関係から脱落していること、そして《行為》と《準拠》・《可能性》に加えて《社会的 sozial》・《関係 Beziehung》、あるいは《存立する bestehen》などの概念群が中心となっていることがわかる。

このことは、これらのネットワークにおいて中心性の高い語群について『カテゴリー』『基礎概念』各節での出現頻度を集計した結果（【図表5】）を見れば、さらに明らかになるであろう。語群《主観》や《客観》は、『カテゴリー』では各節で比較的均等に出現しているのに対し、『基礎概念』では冒頭第1節の「社会学と社会的行為」の概念規定以外にはほとんど出現しない。さらに『カテゴリー』に比べて『基礎概念』では《予想》の出現頻度が大きく下がっていることがわかる。つまり、《主観》《客観》《予想》という、『カテゴリー』の理論構成では中心的な位置を有していた諸概念が、『基礎概念』では、冒頭での方法論的な概念規定以降の理論構成ではほとんど出現しないことが確認できるのである。

だが、これは何を意味するのであろうか。この点について検討するために、以上の分析結果を踏まえたうえで、今度はウェーバーのテキスト自身に立ち返り、その内容に関する意味解釈を行ないたい。この意味解釈を通じて、ここまでの計量分析の結果が何を意味するのかが明らかとなるだろう。

4. 分析(2) テキストの意味解釈による計量分析の評価

すでに述べたように、『カテゴリー』の理論構成は行為者の主観的な意味を起点とする。行為者は自らの主観的な意味（意図、目的、動機）を抱き、それに基づいて行為する。だがその際には当然ながら他者の行為を予想しなければならない。そしてその「他者」の側でも当然こちらの行為を予想しているだろう。だとすれば、最も基礎的な社会関係は、複数の行為者が互いに相手の行為（およびその「主観

的な意味」）を予想しながら行為しあう、という極めて不安定で流動的な関係（＝「ゲゼルシャフト的行為」）である。

こうした状況に対し、行為者たちは一定のルール（『カテゴリー』では「制定された秩序 gesatzte Ordnung」と呼ばれる）を定めることで一定の安定性を見いだそうとする（「ゲゼルシャフト結合」）。とはいえ、「ルールの成立」は「誰もがルールを順守する」ことを意味しない。というのも、「誰か一人がルールに違反した」だけで「ルールが成立していない」とは言えないからである（誰かが赤信号を無視したとしても、そのことが直ちにその信号自体の「無効」を意味するわけではない）。つまり、「ルール違反が罰せられる」、あるいは「ルール違反がばれないように隠す」こともまた「ルールが成立していること」の帰結の一つなのである。

言いかえれば、「ルールの成立」とは「全員がルールを守る」ことではなく「行為者が『他人はルールを守るだろう』という予想に基づいて行為する（＝行為を予想に準拠させる）」ことに他ならない。このことをウェーバーは『カテゴリー』で以下のように定式化している。

目的合理的に制定されたある秩序の経験的な「妥当」という点で決定的なのは、個々の行為者が自身の行為を、自分たちが主観的に解釈した意味内容に対応させて準拠させる、ということではない。秩序の経験的「妥当」はむしろ次の二つのことを意味しよう。(1) 実際に（主観的に）各人が平均して次のような予想を抱いていること。すなわち、ゲゼルシャフト結合した他の人々が、制定された秩序の遵守を彼らの行為の指針としている「かのように」平均的に行動をするであろう、という予想である。(2) 人間行動の可能性について平均的に適用し得る判断にしたがえば、各人がこうした予想を客観的に抱いたであろうということ（「適合的因果関係」のカテゴリーの一特殊形態）。論理的には、この二つのことそのものは厳格に区別されねばならない。[MWG I/12: 409 = 1990: 52-3]

さて、ここで注意すべきなのは、(1)「行為者の主観的な予想」と、(2)「『客観的に見て行為者たちはこう予想しただろう』という（観察者の）判断」とは論理的に区別されるべきだということ、そして「秩序の妥当」（ルールの成立）とは、この(2)の水準において、あくまで「可能性」として＝確率的にしか言えない事象であるということ、である。だからこそウェーバーはこの記述の直後に、「あるゲゼルシャフト関係 [ルールに基づく関係——引用者、

以下同様]が、存続しているか、あるいはもはや存在しないか、という、論理的には一見相いれないような二者択一の間には、実際には切れ目のない移行段階が存在する」[MWG I/12: 410=1990: 55]とさえ述べるのである。

だが、ここでさらに『カテゴリー』に特徴的なのは、この客観的可能性を見積もる能力を（平均的には）行為当事者たちも有していると想定することである。となると、行為者の主観的な予想に関する（本来は観察者側に位置づけられる）客観的可能性に関する判断が、再び行為者の主観的予想へと繰り込まれることになる。つまり、『カテゴリー』で行為者たちは「客観的可能性を他者はこう見積もるであろう」ということを予想しつつ、その予想に自らの行為を準拠させる、と想定されるのである。すなわち、行為者たちは（少なくとも理念型的には）、どれほどルールや協定で互いの予想の確実性を高めようとも、どこまでいっても互いに予想を予想しあう、いわばダブル・コンティンジェンシー状況を抜け出すことはできないのである。

こうした概念規定が、秩序の存在／不在を「切れ目のない流動的な移行」ととらえる『カテゴリー』の秩序観の重要な要素であることは明らかであろう。実際、『カテゴリー』において秩序の流動性は秩序を実体視しないために必要不可欠な契機であり、その意味で、上記のダブル・コンティンジェンシー状況は『カテゴリー』において（少なくとも第一義的には）解決されるべき問題ではなく、必要な認識と言ってよい。

そしてこうした認識は、いうまでもなく「諒解」概念にも妥当する。『カテゴリー』の定義に従えば、「諒解」とは、上記のようなルールがないにもかかわらずルールがある「かのうに」行為者たちの行為が経過する事態を指す。具体例としては、言語や貨幣などにおける「デファクト・スタンダード」を想像すればわかりやすいだろうか¹²。つまり、「他人もAという行為をするだろう」と予想するからこそ各行為者はAという行為をするのだが、その予想が成り立つのは、実際に各行為者がAという行為を行なっているからに過ぎないのである。以下、長くなるが、念のために『カテゴリー』での「諒解」概念の定義を確認しておこう。

……我々は「諒解」として以下の事態を考えることとしよう。すなわち、他者[bとする]の行動に関する予想に準拠した[行為者aの]ある行為について、[aが抱く]この予想が実現する可能性が経験的に「妥当する」、という場合に、この他者[b]が、協定がないにもかかわらず、[aが抱く]この予想を自分[b]の行動にとって有意味に「妥

当性のある」ものとして扱うだろう、という蓋然性が客観的に存在するためにそうなる、という事態である。……。客観的に——つまり可能性を見積もり得るという意味で——「妥当している」諒解と、個々の行為者が、自分の抱いている予想を他者が意味の上で妥当性あるものと扱うであろう、と主観的に当てにすることは当然混同してはならない。この点では、協定された秩序の経験的な妥当と、その秩序について主観的に考えられた意味が順守されるであろうという主観的な予想との関係と同様である。だがこの二つの事例ではともに、平均的には、予想の実現可能性が客観的に妥当しているという……事態と、平均的には[行為者たちが]こうした予想を抱いているという事態との間に、理解可能な形で適合的な因果関係という関係が存在する。

[MWG I/12: 422 = 1990: 85-7]

ここでも、引用中で指摘されているように、上記の「ルールの成立」とまったく同じ事態が生じていることが確認できるだろう。すなわち、「諒解」においてもまた、主観／客観の二重性と、「予想」を通じた客観の主観への繰り込み、その帰結としてのダブル・コンティンジェンシー状況を契機とした秩序の流動性が存在するのである。

いや、こうした主観／客観の二重性と相互の予想に由来する秩序の流動性は、「諒解」概念にとってこそ本質的と言える。それゆえ、『カテゴリー』に即して言うならば、「諒解」概念にとって「ゲゼルシャフト行為は制定律によって秩序づけられた特殊事例に過ぎない」[MWG I/12: 426=1990: 96]ともウェーバーは述べている。その意味では、「諒解」概念が含意する流動性の契機は、ルールに基づく諸制度も含め、原理的にはあらゆる社会制度に及ぶ根底的な契機と考えられていることがわかるだろう。

さて、このように見てくると、『基礎概念』で「諒解」という概念が放棄されていることが単なる用語法の変更であるか否かは、理論的に極めて重要な問題となる。というのも、「諒解」概念の放棄が単なる用語法の問題でないとするなら、ここまで見てきたような、主観／客観の二重性とそこでの相互の予想に起因する秩序の流動性、という理論構成の根幹部分に関する変更を意味し得るからである。

そして、すでに見た『基礎概念』の共起ネットワーク図【図表4】は、これが理論構成の変化であることを示唆している。つまり、『基礎概念』の共起ネットワークにおいて《主観》の重要性が低下し、《客観》と《予想》がネットワークから脱落しているのは、「諒解」という用語の放棄が単なる用語法の問題ではな

く、主観／客観の二重性と、そこで生じる相互の予想という問題もが放棄されていることを意味する、と解釈できるのである。

このことは、以下の『基礎概念』の一節からもうかがえる。この箇所は、『基礎概念』において「客観的 objektiv」という語が出現する数少ない箇所の一つである。

互いに方向づけられた行為の当事者たちが、個別ケースにおいて同一の意味内容をその社会関係に持ち込んでいるとか、相手の方向づけに意味において対応した形で内的にこの相手に方向づけている、つまりこの意味で「相互性」が存在する、などとはいかなる意味においても言うことはできない。……。この場合には他ならぬ関係当事者たち自身がその行為にそれぞれ異なる意味を結びつけているのであり、客観的に見れば objektiv この社会関係はその限りで双方の側にとって「一方的」なわけである。しかしそれでもこの社会関係が相互的に関係づけられているというのは、一方の行為者が相手に対して、相手が自分に対して特定の方向づけをとることを（完全になし部分的に間違っているかもしれないが）前提し、この予想に自分自身の行為を方向づける限りでのことである……。だが、我々の用語法からするならば、双方向性の欠如が「社会関係」の存在を排除するとしたら、それはこの欠如の結果として、双方の行為の間での相互の関係づけが実際に欠如する場合だけである。 [MWG I/23: 178=1968: 45]

この一節そのものはさまざまな解釈の余地を含むが、少なくともここで確認できるのは、「客観的な『一方性』」が行為者自身の（主観的な）予想へと再度繰り込まれる契機が想定されていないことである。つまり、「相手はそう思っていないのではないかと」予想し、その予想に行為者が行為を準拠させる、つまり予想を主観へと繰り込む、という記述が消え去っているのである。その意味で、『カテゴリー』で見たような、主観／客観の二重性と相互の予想に起因するダブル・コンティンジェンシー状況、という流動的秩序観の理論構成は、『基礎概念』の「社会関係」概念には見出しがたいと言えよう。そしてこのことは『基礎概念』の理論構成全体に及ぶことになる。

もちろん『基礎概念』にも秩序の流動性への言及はみられる [z. B. MWG I/23: 178-9=1972: 44-5]。だが、それはたんに個々の行為者が自らの意図・目的等を変化させるというレベルにとどまっており、『カテゴリー』のように、主観／客観の二重性と相互の予想を介したダブル・コンティンジェンシー状

況という複雑な理論構成はうかがえない。

このように見てくれば、『カテゴリー』から『基礎概念』への変化は、単なる用語法の問題ではなく、理論構成の基礎的な部分に関わる本質的なものであったことが、計量分析による「検証」をともなって明らかになったと言えよう。

5. 分析 (3) 『支配の社会学』と『支配の諸類型』の計量分析と考察

さて、以上見てきたような、『カテゴリー』から『基礎概念』への理論構成の変更は、より具体的な社会学の内容に影響を及ぼしているのであろうか。及ぼしているとするなら、それはどのような影響だろうか。

この問題を検討するために、以下では『支配の社会学』（以下、文中では『社会学』と略）と『支配の諸類型』（同じく『諸類型』と略）、特に両者の支配概念論と官僚制論とについて、まずは計量的な比較による分析を行なう¹³。

分析の手順は上記3節とおおむね同様であり、紙幅の都合もあるので、手順そのものについての説明はごく簡単にしておこう。すなわち、KH Coderによって、まず両テキストにおける頻出語を抽出し、各単語の頻度を比較する。そのうえで主要な頻出語について、コーディングによって変化形や派生語・合成語を語群としてまとめる（まとめた語群に恣意的な変化が生じていないかは、語群の頻出度でチェックする）。こうしてまとめた各語群について、それぞれの出現頻度、および共起ネットワーク図を作成して比較する、という手順である。

こうして得られた結果をまとめたものが【図表6～8】である。【図表6】は頻出語群の頻度順リストの対照表であり、【図表7】は『社会学』、【図表8】は『諸類型』における語群の共起ネットワーク図である。

ここからもいくつかの（既によく知られている）事柄は確認できる。たとえば、『発展する entwickeln』や『イングランド England』『ローマの römisch』など、歴史的な記述に関連する語群は『社会学』に頻出する一方で『諸類型』にはほとんど見られない。他方で『行政スタッフ Verwaltungsstab』という用語法が「改訂稿」の時期に特有であることも【図表6】から確認できる。他にも『専有 Appropriation』の語群が『諸類型』に頻出する一方で『社会学』には登場しない¹⁴など、いくつかの点で両者の差異を指摘することはできる。だが、結論から言えば、ここまでの分析からは、先行研究において既知の事柄を除けば、有意な差異を見いだすのは困難である。

そこでこの節では、この二つのテキストにおいて

中心性の高い語群を抽出し¹⁵、それぞれの語群が各節ごとにどのように出現するか、その出現頻度を少し詳しく検討したい。

それぞれの語群について、各節ごとの出現頻度をクロス集計し、ヒートマップとしてグラフ化したのが【図表9】である。【図表9】を一見して気づくのは、いくつかの語群の出現率が『社会学』と『諸類型』との間で明らかに偏っていることである。このうち、『行政スタッフ』や『イングランド』『ローマの』といった語群についてはすでに見たとおりである。

これに対して、本稿の問題設定からは《服従 Gehorsam》と《服従する gehorchen》の不均衡が目目される。というのも、『行政スタッフ』と（どちらのテキストでも概念論の節にはあまり出現しないという意味で偏っている）《官僚制 Bürokratie》を別にすれば、『服従 Gehorsam』と《服従する gehorchen》という2語群は、中心性の高い語群の中では際立って偏りが見られるからである。

とはいえ、この両者はどちらもほぼ同じく「服従」を意味する語群であり、名詞か動詞（および派生した分詞）かという違いぐらいしかないように思われる。その両者の間になぜこのような偏りが生じるのであろうか¹⁶。この点を検討するためには、再度ウェーバーのテキストに立ち入る必要があるだろう。

あらためて【図表9】における2語群の差異に注意しよう。そこで気づかれるのは、『社会学』側のテキストに動詞（群）《gehorchen》がほとんど登場せず、そのことがこの二つの語群の偏りに大きく関わっている、ということである。だとすると、『社会学』では「服従」がどのように論じられているかが問題となるだろう。

この点について、たとえば以下の一節はその代表的な箇所と見ることができる。

……ここでは「支配」を次のような事態として理解することとする。すなわち、「支配者」（単数または複数）の告示された意思（「命令」）が、他者（単数または複数の「被支配者」）の行為に影響を及ぼそうと欲し、そして実際に、この後者の行為が社会的に有意な程度に、あたかも被支配者がこの命令の内容をまさにそれ自身のゆえに自らの行為の格率としたかのように経過する（「服従」）という形で影響している、という事態である。[MWG I/22-4: 135=1960: 11]

これは『社会学』1節1項の末尾近くに登場する、「支配」概念の定義と思しき一節であるが、この一節からは、第4節で確認しておいた、『カテゴリー』における「諒解」概念の定義が連想されるのではな

いだろうか。実際、ここに見られる「かのように」という表現による概念規定、また支配者の主観的な意思（「影響を及ぼそうと欲する」）と客観的な可能性（「実際に……社会的に有意な程度に……経過する」）という二重性は、『カテゴリー』における「諒解」概念の定義に対応するものと言える¹⁷。

だが、そうだとすると、『社会学』における「支配」と「服従」も、前節で見たダブル・コンティンジェンシー状況と、それを契機とした流動性を免れないことになるだろう。実際、『社会学』での《Gehorsam》概念の用例としてしばしば見られるのは、支配者による「服従義務の要求 Anspruch der Gehorsamspflicht」と、それが（客観的に）有意な確率で実現する、という二重性なのである[z. B. MWG I/22-4: 129, 138=1960: 6, 13]。そうであれば、論理的には当然のこととして、この二重性は前節で見た相互的な予想を含意することになるし、そこからは「支配」－「服従」関係の根底的な流動性が帰結するだろう。その意味では、『社会学』における「支配」－「服従」関係は、『カテゴリー』における秩序と同じ流動性を抱え込んでいると見ることができる。

これに対し、こうした主観／客観の二重性（および相互的な予想）が『基礎概念』で放棄されたのは前節で見たとおりであるが、このことは『諸類型』についても確認することができる。たとえば、『諸類型』における「支配」概念の定義を見ておこう。

「支配」とは、その定義（1章16節[『基礎概念』の16節を指す——引用者]）からして、特定の（あるいはすべての）命令に対して、明示可能な一群の人々に関して服従を得る可能性のことである。……。この意味での支配（「権威」）は、漠然とした慣れからはじまって純粹目的合理的な考慮に至るまで、個々の事例ごとに従順性の多種多様な動機に基づきうる。[MWG I/23: 449=1970: 3]

ここでの「支配」概念の定義は、実際には参照されている『基礎概念』での「支配」概念の定義とほぼ同一である。そしてこの定義からも、上記のような二重性が消去されていることがうかがえるであろう。もちろん、『基礎概念』と『諸類型』においても、「支配」の存立は可能性の問題（＝流動性を含んだ存在）と捉えられているし、「服従」概念の定義には「かのように」という規定も見られる[MWG I/23: 452=1970: 7]。だが、それらは『カテゴリー』および『社会学』の概念枠組のなかで有していた意味を失っていると言わざるをえない。すなわち、『諸類型』における「支配」の流動性は、単に服従者の動機の変化に由来するのであって、『カテゴリー』や『社

会学』におけるように、主観／客観の二重性と相互的な予想から生じる流動性ではないのである。

以上の検討が妥当だとするならば、『カテゴリー』から『基礎概念』への理論構成の変更は、「支配」－「服従」の流動性を理論的にどう位置付けるかという、『社会学』から『諸類型』への変化における重要な契機に影響を及ぼしていると考えられよう。だとすれば、『カテゴリー』から『基礎概念』への理論構成の変更は決して小さなものでも、単なる「用語法」上のものでもないと判断できることになる。実際この変更は、ウェーバーの支配論という、より具体的な社会学の内容にも影響を及ぼしているのである。

6. まとめ

以上、『カテゴリー』と『基礎概念』、『支配の社会学』と『諸類型』について、計量テキスト分析と意味解釈とを接合しながら検討を進めてきた。

最後に、以上の検討から確認できることをまとめておこう。

まずウェーバー解釈に関しては、以下の諸点を挙げるができる。

- ・ 「諒解」概念の放棄を中心とする『カテゴリー』から『基礎概念』への改訂は、やはりある程度大規模な理論構成の変更とみることが可能である。
- ・ その変更のポイントの一つは、『カテゴリー』に見られた主観／客観の二重性および相互的な予想という契機が、『基礎概念』で実質的に放棄されたことにある。
- ・ この理論構成の変更は、単なる用語法の変更ではなく、実際に、支配論という具体的な社会学の内容にも一定の影響を及ぼしている。

次いで、計量分析と意味解釈との接合という手法について、以下の諸点を挙げておきたい。

- ・ 意味解釈の対立状況を「検証」する手がかりとして、計量分析は一定の有効性を持ちうる。
- ・ 他方で、計量分析から得られたデータの解釈には、やはり意味解釈が必要となると思われる。
- ・ また、計量分析そのものにも解釈・判断が加味されていることには留意する必要がある。具体的には、対象とするテキストの選定、コーディングにおける語群の設定基準、および着目すべき語（群）への絞込みなどの点である。

以上のまとめからうかがえるように、計量テキスト分析は決して万能ではないし、利用する上で留意

すべき点も少なくない。しかしこうした計量的手法は決して意味解釈と排他的なものではなく、むしろ相補的なアプローチによってこそ、両者はより実りあるものとなりうる。そしてこの両者が相補的に発展することは、学説史研究の将来にとっても決して小さくない意味を有しうるのではないだろうか。

本稿が、学説史研究の将来を拓くためのささやかな一歩となることを願ってやまない。

¹ ここで「検証」の語にカギカッコを付しているのは、実際には計量的なアプローチにも解釈や判断の入る余地があるため、まったく独立した方法による検証とは言い難い面があるからである。ただし、計量的なアプローチでは、前提や条件設定のどこに解釈や判断が入っているかを明示することができる。その意味では、計量的なアプローチに含まれる解釈や判断もまた検証可能である。この点については後述を参照。

² 文・段落・節など一定の単位内で複数の語が同時に出現することを指す。ある単語ともう一つの単語がある個所で同時に出現することを「共起する」、その比率が高いことを「共起度が高い」と言い、ある単語から見て共起度の高い単語のことを「共起語」と言う。

³ 国内において古典的なテキストの解釈にこの手法を用いた近年の例として、たとえば左古 [2010]、小峯編 [2021]などを参照。本稿の筆者も左古編 [2021] にウェーバーを主題として1章を寄稿している。

⁴ 旧稿の概念規定について『カテゴリー』を参照することの妥当性については折原 [1996]を参照。なお、世良訳 [1960]の9章2節「正当的支配の三つの純粋型」は、今日では『経済と社会』とは別種の草稿と判断されている。詳しくは全集版22巻第4分冊の“Editorischer Bericht”[MWG I/22-4: 717-725]を参照。

⁵ 第4版以降の『経済と社会』に関しては、編者ヴィンケルマンによる改変の可能性が指摘されている [折原 1988]。

⁶ 詳しくは樋口 [2014] 参照。

⁷ もちろん分析の目的によってはこれらの語群が必要となる（むしろこれらこそが重要となる）場合もある。私見では、計量テキスト分析は語法・文体分析／概念分析／内容分析の3つのレベルを相対的に区別できるように思われる。ここで削除する動詞類は、語法・文体分析であれば重要な意味を持つであろうが、本稿の目的である概念分析のレベルではさしあたり不要であろう。

⁸ ドイツ語の一般的な特徴としてよく知られて

いることだが、ドイツ語では一つの語から多数の派生語・合成語を作り出すことができる。たとえば Kampf (闘争) という名詞からの派生語として kämpfen (動詞：闘う)、さらに Kämpfer (名詞：闘う者、闘争当事者)、また合成語として Kampfspiel (名詞：競技 [闘争的ゲーム])、Konkurrenzkampf (名詞：競争的闘争) など、多数の語が作り出され、実際に用いられている。したがって、これらの語を抽出して語群としてまとめることが分析のうえで不可欠となる。さらに動詞・名詞・形容詞の変化形 (格変化や単複・性による変化など) も存在するが、KH Coder の用いているドイツ語辞書がこれらの語をどのように抽出するかはわからないので (これは KH Coder の問題ではなく辞書の問題である)、これらの変化形も語群としてまとめる必要がある。

⁹ ただし、この二つのテキスト自体の語数が異なる (『カテゴリー』が総語数 14,378 語であるのに対して『基礎概念』は 19,025 語と 1.3 倍以上) ため、出現回数自身を直接比較することはできない。また、ソフトの仕様により (ドイツ語に特有な) 大文字・小文字の区別やウムラウトの処理には若干の不整合が見られる。

¹⁰ 本来であれば、すべてのコーディング・ルールをここで明示するべきであろう。だが、前注で述べたように、ドイツ語には派生語・合成語が多数存在し、かつ KH Coder の用いているドイツ語辞書が各語の変化形をどのように抽出するかはわからないので、これらの派生語や変化形もコーディング・ルールに含める必要がある。このため、コーディング・ルールに挙げるべき語が膨大な量となってしまう、ここでそのすべてを挙げることはとうてい不可能である。ここではこうした事情の例示も兼ねて、先に触れた「闘争 Kampf」に関するコーディング・ルールのみを挙げておく。「Kampf」に関する語群として抽出されるのは、以下の語である。

[*Kampf : kampf or Kampf or Kampfes or Kämpfe or bekämpfung or Bekämpfung or existenz_kampf or Existenzkampf or kämpfen or Kämpfen or kämpfend or kämpfenden or kämpfer or Kämpfer or kampfspiel or Kampfspiel or konkurrenzkampf or Konkurrenzkampf]

ここでは、主要な頻出語を網羅するように各語群についてこうしたコーディング・ルールを設定し、70 個の語群を抽出した。

¹¹ なお、共起ネットワーク図の作成に際しては、分析の単位を文とし、共起度の高い上位 100 個の共起関係を抽出し、他の語群との共起関係の数 (次数) に基づいて中心性 (次数中心性) を判定している。中心性の概念については田中 [2013]、鈴木 [2017] を参照。また、図では中心性の高い語群ほど灰色が

濃く、低いほど白く描画されている。

¹² たとえば「グローバル言語として英語が用いられる」のは、何らかのルールに基づくのではなく、「他者が英語を用いるから」という予想に基づいて行為者が「自分も英語を用いる」ことによるが、その結果として「英語を使うことがルールとして決まっているかのような」事態が生じることになる。また、貨幣の例は近代国家の法定通貨には当てはまらないと思われるかもしれないが、中世の日本で (法的な裏付けがないにもかかわらず) 中国の宋銭が「事実上」貨幣として流通していたことを考えればわかりやすいだろう。貨幣の流通も、究極的には「他人もこの貨幣を受け取るだろう」と予想するからこそ、行為者が「この貨幣を受け取る」ことによって成立している。この点については橋本 [2015] も参照。

¹³ ここでこの二つのテキストを対象とした理由をやや詳しく述べておきたい。

先に触れたように、私見ではテキストマイニングによる分析では語法・文体／概念／内容の三つのレベルを区別できると思われるが、特に概念分析と内容分析は、現実には統計処理だけでは区別が困難である。たとえばある語 (群) の出現頻度の変化が概念上・理論上の変化によるのか、それとも内容 (テキストの論述対象) の変化によるのかは単純に区別できず、むしろ相互に関連しあっていると考えるのが自然であろう。だが、そうすると本稿で検討しているような概念の変化を主に取り出すためには、内容が大幅に共通しているテキスト群を比較する必要がある。今回、特に『支配の社会学』『諸類型』の概念論と官僚制論を取り上げたのは、この条件を満たすことを目的としたものである。とはいえ、もちろんこの判断については異論もありえよう。後にも触れるが、テキストマイニングをはじめとする計量分析は、前提や条件設定に解釈や判断が入る余地がつねに存在する。

¹⁴ 実際には「専有」概念は『社会学』の「家産制的支配」の章で頻出する。この対照表に現れないのは、今回の分析対象にこの章が含まれていないからである。このことも興味深い差異ではあるが、本稿の範囲を超えているため、この点の検討は別稿に委ねたい。

¹⁵ 抽出したのは以下の語群である。

《官吏 Beamte》《制約された bedingt》《支配された beherrscht (被支配者 die Beherrschten など)》《存立する bestehen》《官僚制 Bürokratie》《官僚制化》《発展する entwickeln》《自由な frei》《形成体 Gebilde》《服従する gehorchen》《服従 Gehorsam》《支配者 Herr》《歴史的な historisch》《利害関心 Interesse》《実質的な materiell》《近代の modern》《動機 Motive》《公的な öffentlich》《経済的な ökonomisch》《秩序

Ordnung》《組織 Organisation》《人的な persönlich》
《政治的な politisch》《原理 Prinzip》《合理的な
rational》《法 Recht》《ローマの römisch》《事象的
sachlich》《社会的な sozial》《特有の spezifisch》《国
家 Staat》《技術的な technisch》《分離する trennen》
《類型 Typus》《団体 Verband》《行政 Verwaltung》《行
政スタッフ Verwaltungsstab》

¹⁶ 実を言えば、両者を類義語として同じ語群に含
めてしまえば、この偏りは見えなくなる。その意味
で、上述の「コーディング」はかなり重要な解釈・
判断を含む手順といえる。その意味で、この手順は
冒頭で触れた「前提や条件設定に解釈・判断が入る」
という具体的な事例の一つと言えよう。

¹⁷ 『カテゴリー』において、「諒解」の事例とし
て「支配」が挙げられていること [MWG I/12: 421-
2=1990: 85] も参照。

【文献】

〔ウェーバーの著作〕

MWG I/12: *Verstehende Soziologie und
Werturteilsfreiheit*. 2018, Tübingen.

=1990: 海老原明夫・中野敏男訳『理解
社会学のカテゴリー』, 未来社.

MWG I/22-4: *Wirtschaft und Gesellschaft.
Herrschaft*. 2005, Tübingen.

=1960: 世良晃志郎訳『支配の社会学 I』,
創文社.

MWG I/23: *Wirtschaft und Gesellschaft.
Soziologie*. 2013, Tübingen.

=1968: 阿閉吉男・内藤莞爾訳『社会学
の基礎概念』, 角川書店.

=1970: 世良晃志郎訳『支配の諸類型』,
創文社.

〔その他の著作〕

橋本直人 2015: 「マックス・ウェーバーにおけ
る行為論の転換と貨幣論」, 『社会学史
研究』 37 号, 59-74

Hermes, Siegfried 2003: *Soziales Handeln und
Struktur der Herrschaft*, Berlin, 2003.

樋口耕一 2014: 『社会調査のための計量テキス
ト分析』, ナカニシヤ出版.

小峯敦 (編) 2021: 『テキストマイニングから読
み解く経済学史』, ナカニシヤ出版.

Lichtblau, Klaus 2000: „ ‚Vergemeinschaftung‘
und ‚Vergesellschaftung‘ bei Max
Weber“, *Zeitschrift für Soziologie*, 29(6):
423-443.

折原浩 1988: 『マックス・ヴェーバー基礎研究
序説』, 未来社.

左古輝人 2010: 「社会の科学とテキストマイニ

ング」, 『人文学報』 422 号, 73-98.

左古輝人 (編) 2021: 『テキスト計量の最前線』,
ひつじ書房.

Schluchter, Wolfgang 2009: „Die soziologischen
Grundbegriffe: Max Webers Grundlegung
einer verstehenden Soziologie“, Wolfgang
Schluchter, *Die Entzauberung der Welt*,
Tübingen, 111-136.

シュルフター, ヴォルフガング/折原浩 2000:
『『経済と社会』再構成論の新展開』, 未
来社.

鈴木努 2017: 『ネットワーク分析』 (第 2 版),
共立出版.

田中京子 2013: 「KH Coder と R を用いたネッ
トワーク分析」, 『久留米大学コンピュ
タジャーナル』 28 巻, 37-52.

Tenbruck, Friedrich 1977(1999): „Abschied
von 'Wirtschaft und Gesellschaft'“,
in: Friedrich Tenbruck, Harald
Homann(Hg.), *Das Werk Max Webers.
Gesammelte Aufsätze zu Max weber*,
Tübingen.

【図表 1】『カテゴリー』『基礎概念』頻出語対照表
(上位 50 位、数字は出現件数)

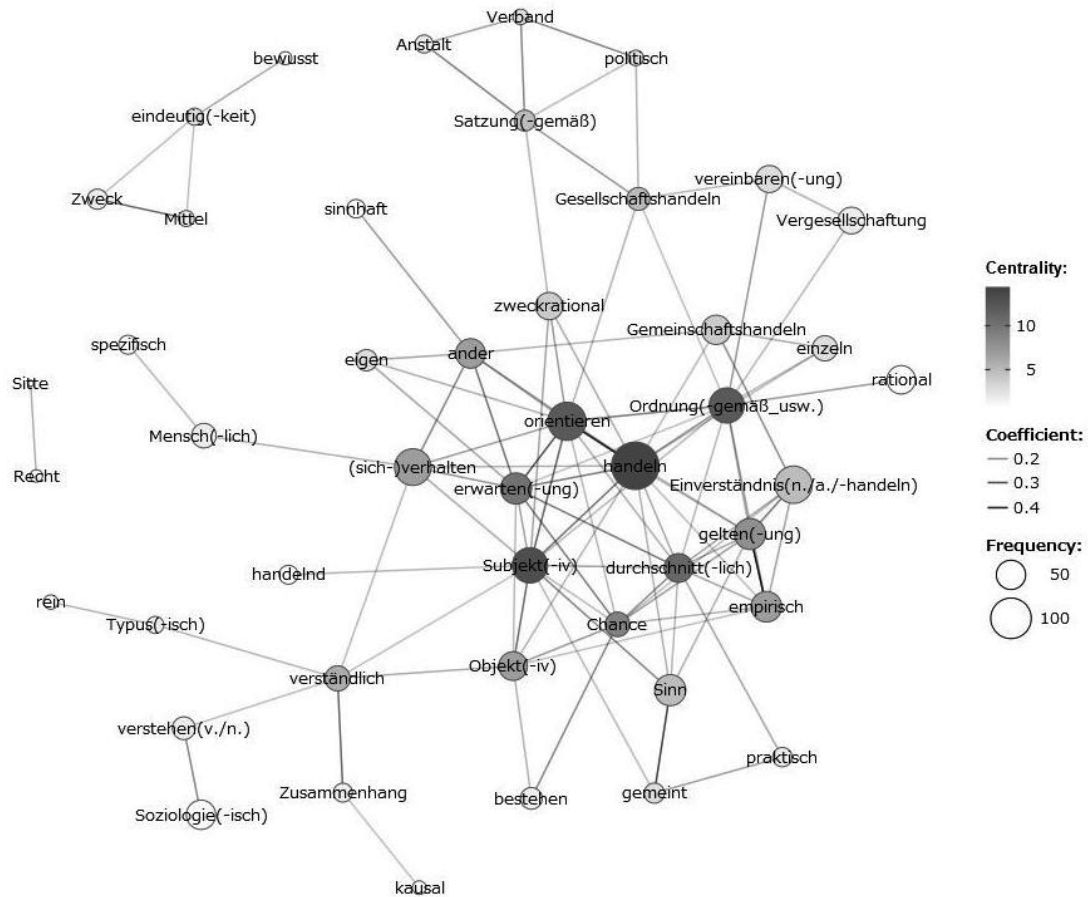
Kategorien	
handeln	159
subjektiv	92
ordnung	86
verhalten	64
rational	61
sinn	60
erwartung	59
empirisch	56
gemeinschaft_handeln	53
ander	50
art	50
durchschnittlich	46
fall	44
sinn_haft	42
vergesellschaftung	42
bestimmt	40
verständlich	39
einzel	38
einverständnis	38
orientieren	38
gesellschaft_handeln	37
chance	35
objektiv	34
ei_verständnis_handeln	31
mensch	30
verschieden	29
zweckrational	29
orientiert	27
soziologie	27
eigen	26
gemeint	24
soziologisch	24
beteiligte	24
satzung	24
vereinbarung	24
orientierung	23
zweck	23
zusammenhang	22
geltend	20
gleich	20
praktisch	20
spezifisch	20
liegen	20
vereinbart	19
verstehend	19
wichtig	19
geltung	19
gelten	19
psychisch	17

Grundbegriffe	
handeln	236
sozial	105
ordnung	105
sinn	83
art	81
beziehung	69
fall	67
chance	64
verband	63
orientieren	59
bestimmt	58
verhalten	52
tatsächlich	50
soziologie	50
rational	40
mittel	40
bestehen	40
handeln	40
einzel	38
begriff	37
zweck	37
politisch	35
mensch	33
gelten	33
ander	32
soziologisch	32
verschieden	29
sinn_haft	28
verstehen	28
typisch	27
verständlich	27
sitte	27
geltend	25
maß	25
rein	24
ablauf	24
recht	24
bedeuten	24
gemeint	23
kausal	23
orientierung	23
regel	23
müßen	23
beteiligte	22
wert_rational	21
geltung	21
typus	21
verwaltung_stab	21
vorgang	21

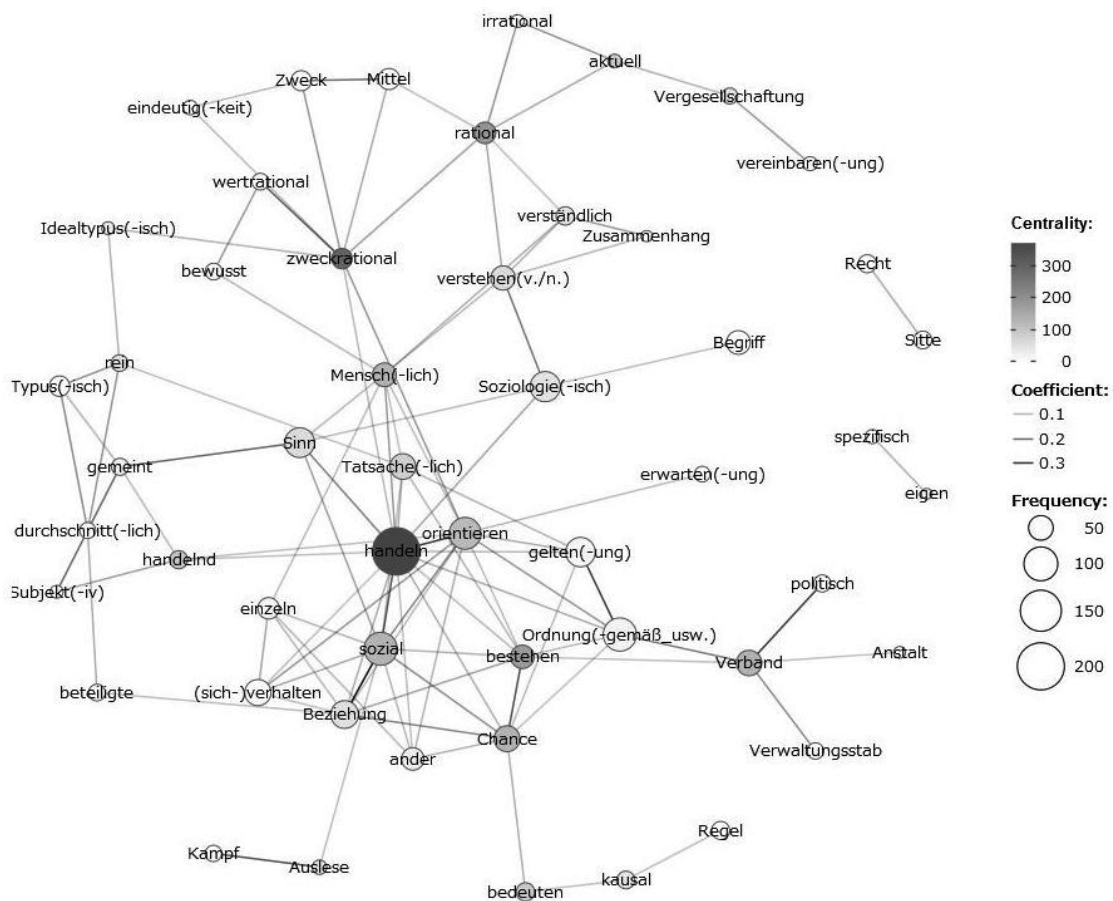
【図表 2】『カテゴリー』『基礎概念』の頻出語群対照表
(上位 50 位、数字は出現件数と出現箇所の割合)

Kategorien			Grundbegriffe		
*handeln	139	28.78%	*handeln	203	27.85%
*orientieren	88	18.22%	*Ordnung(-gemäß_usw.)	96	13.17%
*Einverständnis(-handeln)	84	17.39%	*sozial	95	13.03%
*(sich-)verhalten	81	16.77%	*orientieren	88	12.07%
*Subjekt(-iv)	75	15.53%	*Soziologie(-isch)	78	10.70%
*Ordnung(-gemäß_usw.)	74	15.32%	*Sinn	76	10.43%
*erwarten(-ung)	57	11.80%	*gelten(-ung)	74	10.15%
*gelten(-ung)	57	11.80%	*Beziehung	65	8.92%
*Sinn	57	11.80%	*(sich-)verhalten	57	7.82%
*empirisch	55	11.39%	*Chance	56	7.68%
*ander	51	10.56%	*Tatsache(-lich)	55	7.54%
*Gemeinschaftshandeln	50	10.35%	*Verband	54	7.41%
*Soziologie(-isch)	50	10.35%	*verstehen(v./n.)	48	6.58%
*durchschnitt(-lich)	48	9.94%	*Begriff	46	6.31%
*Objekt(-iv)	48	9.94%	*Mensch(-lich)	46	6.31%
*rational	47	9.73%	*bestehen	45	6.17%
*zweckrational	43	8.90%	*ander	41	5.62%
*vereinbaren(-ung)	42	8.70%	*einzeln	37	5.08%
*Vergesellschaftung	41	8.49%	*rational	37	5.08%
*einzeln	36	7.45%	*Mittel	36	4.94%
*verständlich	36	7.45%	*zweckrational	33	4.53%
*Chance	34	7.04%	*Typus(-isch)	33	4.53%
*Mensch(-lich)	34	7.04%	*Zweck	32	4.39%
*Gesellschaftshandeln	29	6.00%	*bedeuten	26	3.57%
*verstehen(v./n.)	29	6.00%	*verständlich	26	3.57%
*bestehen	26	5.38%	*handelnd	25	3.43%
*eigen	25	5.18%	*Recht	25	3.43%
*Satzung(-gemäß)	24	4.97%	*Regel	25	3.43%
*beteiligte	23	4.76%	*kausal	24	3.29%
*gemeint	22	4.55%	*möglich	24	3.29%
*Zweck	22	4.55%	*Sitte	24	3.29%
*Tatsache(-lich)	21	4.35%	*gemeint	22	3.02%
*praktisch	20	4.14%	*politisch	22	3.02%
*Idealtypus(-isch)	20	4.14%	*beteiligte	21	2.88%
*handelnd	19	3.93%	*bewusst	21	2.88%
*spezifisch	19	3.93%	*rein	21	2.88%
*Zusammenhang	19	3.93%	*wertrational	21	2.88%
*Begriff	18	3.73%	*Kampf	20	2.74%
*Grund	18	3.73%	*Verwaltungsstab	20	2.74%
*sinnhaft	18	3.73%	*durchschnitt(-lich)	19	2.61%
*Anstalt	17	3.52%	*Vergesellschaftung	19	2.61%
*psychisch	17	3.52%	*erwarten(-ung)	18	2.47%
*speziell	17	3.52%	*Tatbestand	18	2.47%
*eindeutig(-keit)	15	3.11%	*Vorgang	17	2.33%
*Typus(-isch)	15	3.11%	*Auslese	15	2.06%
*übergang	15	3.11%	*eindeutig(-keit)	15	2.06%
*bedeuten	14	2.90%	*psychisch	14	1.92%
*Beziehung	14	2.90%	*spezifisch	14	1.92%
*Richtigkeitstypus	14	2.90%	*vereinbaren(-ung)	14	1.92%

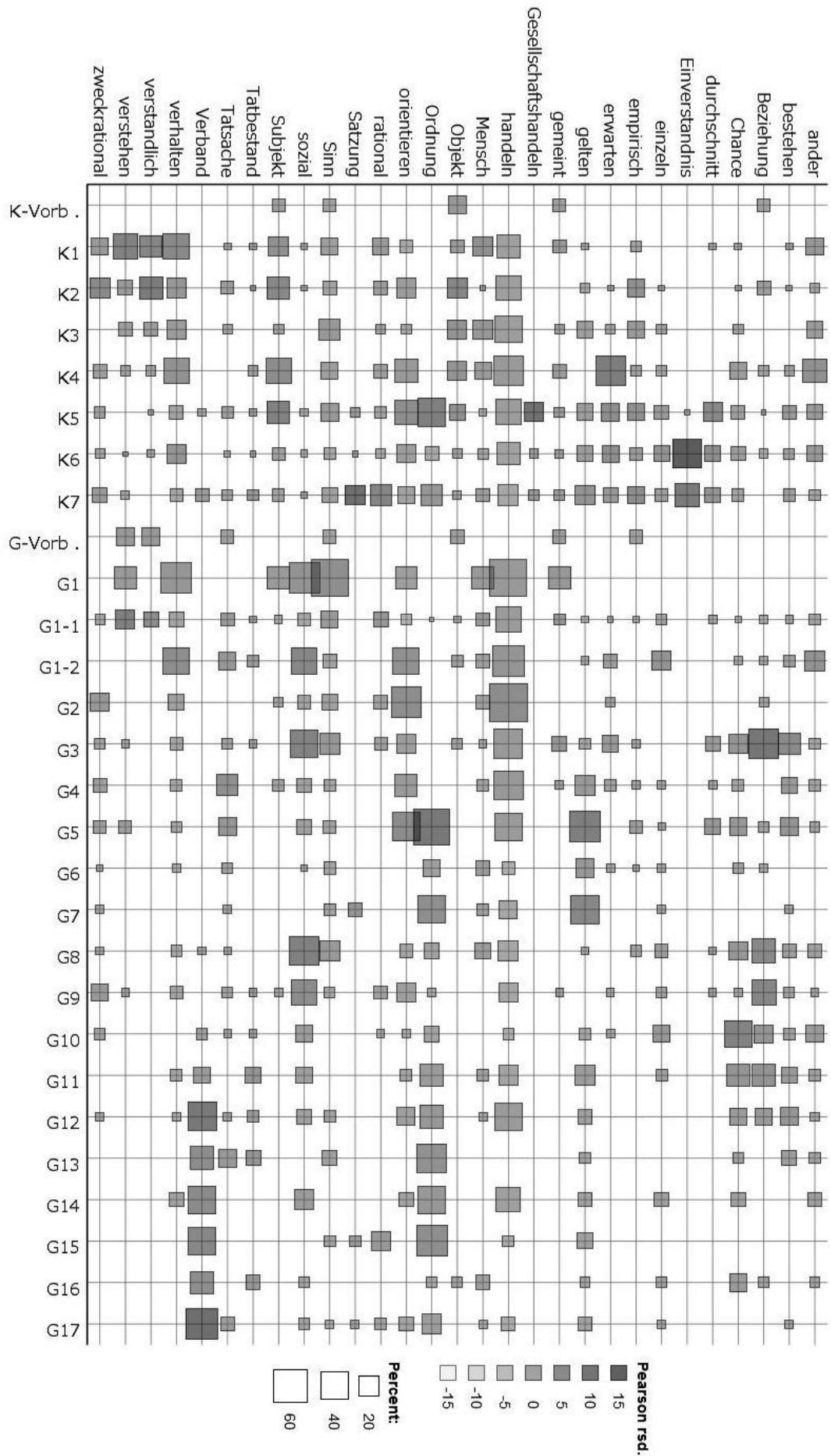
【図表 3】『カテゴリー』の共起ネットワーク図



【図表 4】『基礎概念』の共起ネットワーク図



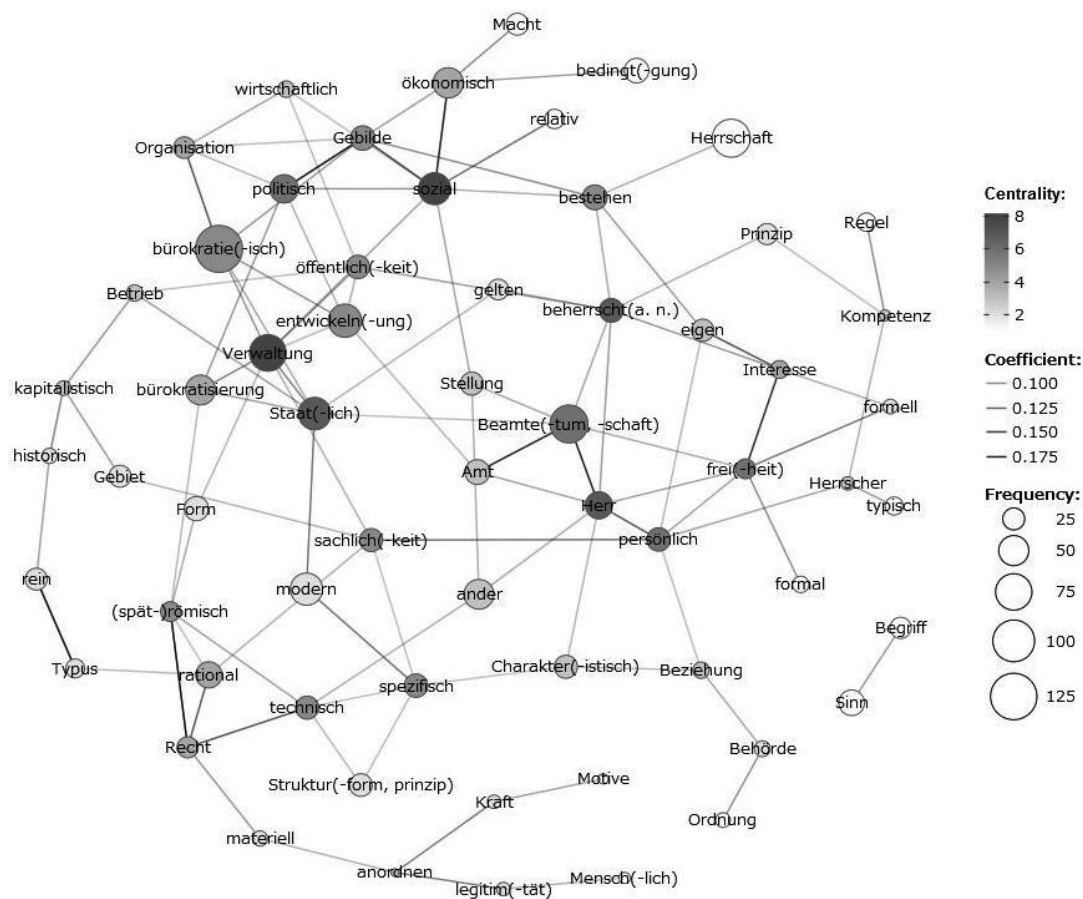
【図表 5】『カテゴリー』『基礎概念』の各節での頻度グラフ
(K は『カテゴリー』、G は『基礎概念』を表す。「Vorb.」は「序言 Vorbemerkung」の略、数字は節番号)



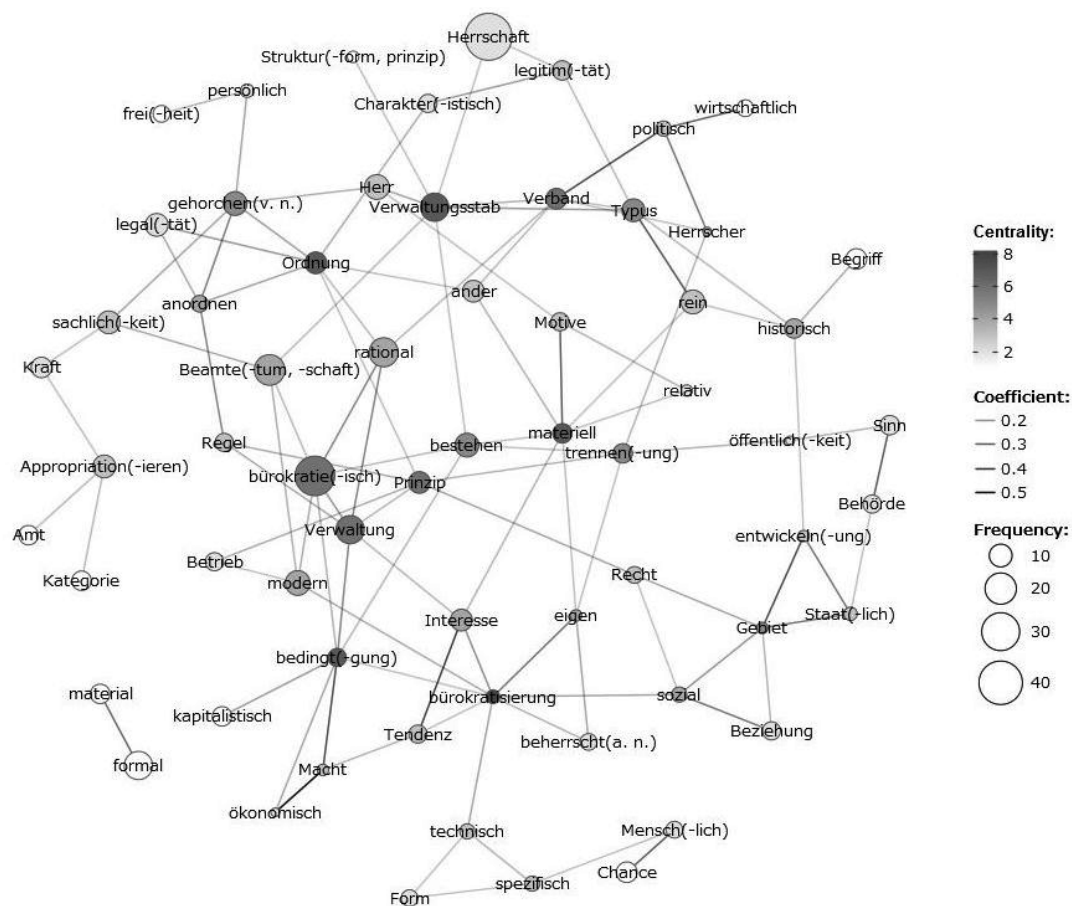
【図表 6】『社会学』『諸類型』の頻出語群対照表（左が『社会学』、右が『諸類型』
数字は【図表 2】と同様）

Soz. Herrsch.			Typen d. Herrsch.		
*burokratie	129	19.03%	*Herrschaft	47	22.27%
*Beamte	82	12.09%	*burokratie	33	15.64%
*Herrschaft	82	12.09%	*Beamte	19	9.00%
*Verwaltung	76	11.21%	*rational	17	8.06%
*entwickeln	62	9.14%	*formal	16	7.58%
*Staat	59	8.70%	*Verwaltung	16	7.58%
*modern	58	8.55%	*Verwaltungsstab	16	7.58%
*sozial	57	8.41%	*Herr	12	5.69%
*ökonomisch	51	7.52%	*modern	12	5.69%
*ander	49	7.23%	*bestehen	11	5.21%
*burokratisierung	49	7.23%	*gehörchen	11	5.21%
*politisch	44	6.49%	*rein	11	5.21%
*Herr	40	5.90%	*Appropriation	10	4.74%
*rational	37	5.46%	*gelten	10	4.74%
*Sinn	35	5.16%	*legal	10	4.74%
*Amt	33	4.87%	*sachlich	10	4.74%
*bestehen	33	4.87%	*Typus	10	4.74%
*bedingt	32	4.72%	*ander	9	4.27%
*Gebilde	32	4.72%	*Interesse	9	4.27%
*Form	31	4.57%	*Ordnung	9	4.27%
*beherrscht	30	4.42%	*Prinzip	9	4.27%
*öffentlich	29	4.28%	*Begriff	8	3.79%
*persönlich	29	4.28%	*Chance	8	3.79%
*spezifisch	29	4.28%	*Kraft	8	3.79%
*Charakter	28	4.13%	*Verband	8	3.79%
*sachlich	28	4.13%	*Amt	7	3.32%
*Stellung	28	4.13%	*historisch	7	3.32%
*technisch	28	4.13%	*kapitalistisch	7	3.32%
*Struktur	27	3.98%	*Kategorie	7	3.32%
*eigen	26	3.83%	*legitim	7	3.32%
*allgemein	25	3.69%	*materiell	7	3.32%
*Gebiet	25	3.69%	*material	7	3.32%
*Macht	25	3.69%	*Sinn	7	3.32%
*rein	25	3.69%	*trennen	7	3.32%
*Organisation	24	3.54%	*typisch	7	3.32%
*Begriff	23	3.39%	*bedingt	6	2.84%
*Prinzip	23	3.39%	*Behörde	6	2.84%
*Recht	23	3.39%	*Betrieb	6	2.84%
*gelten	22	3.24%	*Beziehung	6	2.84%
*England	20	2.95%	*Charakter	6	2.84%
*frei	20	2.95%	*Motive	6	2.84%
*romisch	20	2.95%	*Regel	6	2.84%
*speziell	20	2.95%	*Tendenz	6	2.84%
*relativ	19	2.80%	*anordnen	5	2.37%
*Typus	18	2.65%	*beherrscht	5	2.37%
*Regel	17	2.51%	*Form	5	2.37%
*Interesse	16	2.36%	*frei	5	2.37%
*typisch	16	2.36%	*Gehorsam	5	2.37%
*Gehorsam	15	2.21%	*Mensch	5	2.37%

【図表7】『社会学』の共起ネットワーク図



【図表 8】『諸類型』の共起ネットワーク図



【図表 9】『社会学』『諸類型』の各節での頻度グラフ

(Sは『社会学』Gは『基礎概念』を表す。それぞれ「-1」は概念論、「-2」は官僚制論)

